

何故、加奈だったの？

山村 茜

加奈は私たち家族のいつも中心にいました。そして、常に私の横に居てくれました。お話しやダンスが大好きで、学校であつた色々なことをいつも話してくれました。遊具の使い方や、ルール、下校指導の際の交通ルールなど、先生の言つたことを全て教えてくれました。そして、とても正義感の強い子でした。学校で運動会へ向けて、『カーボーイのダンス』があり、とても嬉しそうに「お母さんには内緒で踊ってあげる。」と、見せてくれたりしました。できない子がいれば、教えてあげてもいました。明るく、とても心が優しく、私がうとうと寝てしまうと必ず布団を掛けてくれました。私たち家族は、いつも加奈の優しさや可愛い笑顔に癒されていました。アンパンマンやドラえもん、プリンセスが大好きで、加奈自身が家の中でもプリンセスでした。反面、臆病なところもあり、一人でどこかへ行ってしまうようなことは一度もありませんでした。私は母子家庭なため、決して裕福な暮らしとは言えませんでした。子どもたちにできる限りのことはしました。加奈はダンスが好きなため、ダンスを習わせたり、小学校入学一ヶ月前から学校の傍にある書道教室に姉と一緒に通わせました。道を覚えてほしく、道に慣れてもらいたく、送ってあげたりもしましたが、どんどん書道の腕が上がり、先生にも、「とても将来が有望です。」と言われました。

小さな頃からドリルを毎月取り、いつも一緒にやりました。一緒に何かできることが嬉しく、「お母さんドリルやろうお。」

とよく言っていました。ですが、私の方が加奈と何かできることが嬉しく、加奈と何かできる時間を作り、大切にしています。

いつもそこに祖母（私の母）の協力がありました。相談相手になってくれ、力を貸してくれ、面倒をみてくれました。加奈が泣いてしまったときは、二人で加奈をたくさん抱きしめるようにしていました。祖母のおかげで子どもたちや、加奈との時間を大切にし、大事に育てることができました。そして、加奈自身が祖母のことが大好きでした。

平成二十三年五月十九日、朝七時。学校へ行き渋る加奈。一緒に行く友達ができ、一週間足らず。

「先に行ってくださいって伝えて。」

と言ったことを、親として素直に受け入れれば良かったと、今では思います。

そんなやり取りをしていたら、友達が迎えに来ました。断ることはできず、私は加奈とお友達の手を繋ぎ、外の横断歩道まで送りました。加奈は、何度も何度も振り返り、一生懸命私に手を振っていました。私も加奈の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けました。加奈の元気で可愛い笑顔を見るのは、それが最後でした。

私は前年から、加奈の入学を考え、都合の利く仕事へ変えました。加奈の学校の送り迎えがなかったからです。

五月十九日、学校へ行き渋った加奈のために、午後一時三十分仕事を終え、加奈の喜ぶであろうポテトや、お菓子を仕事帰りにたくさん買って帰りました。

加奈との約束の場所、自動販売機へ午後二時十五分に向かいました。その日はとても天気が良く、汗だくになり、お腹を

空かせて帰ってくるのが予想できました。たくさん買ったポテトやお菓子に加奈が喜んでくれることが目に見えました。だけど、加奈はなかなか帰って来ませんでした。

「今日は遅いのかなあ。」

と学校の下校時間のお知らせの手紙の記載が違うのか？と、疑問に思っていました。違うのなら違うで、一斉メールをしたら？と思いました。前にもこんなことがあったからです。

私は自動販売機の所から近くをフラフラと行ったり来たりしていました。救急車が午後二時三十分〜午後二時三十五分くらいに私の前を通りました。

「竜爪街道の奥にある老人ホームかな？ まさか、加奈じゃないよね？」

とっていました。

それからすぐのことでした。携帯に西奈小学校から着信が入りました。

「ここはスイミングの所で、山村加奈ちゃんが事故です。すぐ行ってあげてください。」

私は、母に電話をしながら走りしました。

「加奈が事故だって！」

私は気が動転していました。

事故現場は人集り。

「加奈は？加奈は？」

と目にしたのは、担任の先生が救急車の傍にいました。担任の先生は、救急隊員の方に、

「お母さん来ました。」

と伝えました。救急隊員の方に、

「乗ってください。」

と言われた直後、

「あつ、やっぱり見ない方がいい。お母さんは後から来てもらったほうがいい。」

と言われ、手や足の骨折とかではないんだと悟りました。私の考えが甘かったです。生死に係るのなら、余計に加奈の傍にいたかった。離れたくなかった。そのため、「大丈夫！」と言い、乗り込みました。

救急車の扉が開かれ、目に飛び込んできたのは、まだピカピカだったランドセル。入学式を迎え、まだ一ヶ月半。ピカピカだったはずが、ランドセルも、衣服も、髪飾りも、加奈の顔も、全てが血まみれでした。

加奈の口から管を入れ、処置している救急隊員。救急車は動き出し、加奈の手と足は力なく、救急車の揺れに揺られていました。私はまだ温かい加奈の足を擦りながら、

「加奈あ、加奈あ。」

とひたすら呼び続けていました。あの足の温もり、痛々しい血まみれの顔を一生忘れることはできません。

救急隊員は、ひたすら加奈の心臓マッサージをしてくださいました。途中、電子音のアナウンス。

「測定します。離れてください。」

その後流れるのは、“ピーー。”と長く、私もテレビなどで聞いたことのある心停止音でした。救急車の中で、四、五回、その音を聞きました。病院までの道のりがとても遠く感じました。

しばらくしてやっと、こども病院に着きました。何度心停止を聞いても、“こども病院は、こども専門の病院だから大丈夫”と信じたかった。救急隊員に渡された書類を泣きながら書きました。看護師さんに待合室へ案内され、待っていると、救急隊員がすぐ私の所へ来ました。何を話したのだろう？はつきり言って覚えていませんが、ただ救急隊員の方が、

「身体自身は大したことないのですが、頭を轢かれていて、意識がまだないので・・・」

と言いました。もう私に返す言葉はありませんでした。

すぐ親に連絡をしました。加奈の父親にも連絡しました。

「加奈の意識が戻らない。こども病院、すぐに来て！」

と。病院の待ち時間が長くて、何もできない自分が悔しくて、できることなら代わってあげたくて。親なのに代わってあげることができないこと、親なのに子供の危機を救ってあげられなかったことに、悔しくて、苦しくて、泣くことしかできませんでした。無念で仕方ありません。そもそも、何でこんなことになったのか？何故、加奈なのか？私は混乱していました。

一度、中待合室に呼ばれました。担当の先生に色々聞かれたと思います。加奈はO型で、今から輸血をする。そのための

血液型確認。担当の先生からは、

「今、処置をしています、救急車に乗ってから十五分意識が戻っていません。かなり厳しい状態ですが、もう少し僕たちも頑張りますので、もうしばらくお待ちください。」

とのことでした。私は、また待合室で待ちました。本当は、少しでも加奈の傍にいたかった。少しでも近くに……。

私の母と、加奈の父親、子供たち、兄夫婦、校長先生、担任の先生、PTA会長も飛んで来てくださいました。それから一時間経ちました。担当の先生に呼ばれました。担当の先生は、

「一時間甦生を続けました。輸血もしました。ですが、意識が戻らないので、これ以上処置を続けると、今度はお体が痛んできてしまうので……。」

と甦生処置を終了することを告げられました。

その後、すぐ加奈に会うことができました。口にはチューブを入れ、顔には内出血で浮き上がっているタイヤ痕がくつきりと。そして加奈の身体はもう冷たかった。血の気のなくなった顔にタイヤ痕。痛々しくて、可哀想で。私はただただ泣くことしかできなかった。もう、加奈を連れて、どんどん帰りたいかった。そこで立っている勇気がなかった。もうこれ以上加奈と離れたくなかった。

病院の先生が死亡確認をし、付けていたチューブ等を外し、お体を綺麗にすると書いていました。そして、警察の調べがあるため、またしばらく待合室で待つことになりました。警察の方が調べに入り、加奈が所持していたランドセルや横断バ

ックを一袋にまとめてきました。チラツと見えたランドセル。チラツと見えた横断バック。血だらけでした。可哀想すぎる。

一時間後、「ご家族どうぞ。」と呼ばれ、動くことのない加奈にやっと会えました。子どもたちは泣いていました。加奈は病院の服を着ていて、二つ縛りにしてあった髪もほどかれ、綺麗なさらさらの髪になっていました。顔のタイヤ痕は内出血の状態のまま、左腕には包帯がぐるぐる巻かれていました。加奈はすでに死後硬直をしていて、病院の帰り、車の後部座席に抱きかかえて帰ったのですが、首はぐらぐらで、私の肘をかなり高く上げないと安定することはありませんでした。家に着き、布団に寝かせてあげました。こたつの上には、加奈のために買って置いたお菓子やポテトが虚しく置いてありました。喜ぶ顔が見たかったのに、もう加奈は何もすることができない。悲しくて、悔しくて、苦しくて、ただただ泣くだけでした。そして、加害者家族が謝りに来ました。加害者の父親と嫁がひたすら謝っていました。そして、任意保険に入っていないことを知りました。加害者家族と話しても、話にならない。話すだけ無駄でした。私自身もまだ加奈の死を受け入れていなかったからかもしれません。

五月二十六日、今日、加害者に会うことになりました。本当は会いたくない。顔も見たくない。加奈を殺した相手を見る勇気がない。ですが、辛い思いをした加奈にちゃんと謝ってもらいたいと思いました。

午後七時、加害者が来ました。玄関先で土下座。

「申し訳ありませんでした。」

私たちが知リたかった事故の状況を加害者からも聞きたかった。そして、加奈の意識があつたかも知リたかった。話を聞

き、ショックが大き過ぎたのを憶えています。最後に、私は、

「この子と六年間しか過ごせませんでした。新しい服を買ってあげたくても一生今のサイズのままです。もっと先まで迎えに行けばよかったとか、この子の危機を私が守ってあげなければならなかったことは、一生私の罪です。だけど、この子を轢き殺したことは、やはりあなたの罪で、この子のために償ってください。そして、お宅にもお子さんがいるように、今まで大変なときもあったと思います。だけど、夫婦だから乗り越えることができたと思います。今回も旦那さんの一大事だと思い、夫婦で力を合わせて旦那さんを支えてあげてください。そして、一生懸命生きた加奈の顔、加奈のことを一生忘れないてください。」

私の精一杯の思いを告げました。

平成二十三年六月二十五日、加奈の一ヶ月前に事故で亡くなった浜松の方から連絡がきました。そして、浜松の方からの紹介で、被害者支援センターに電話相談をしました。

七月五日、被害者支援センターにおいて、初面談を行いました。刑事裁判の流れ、民事裁判の流れ等、丁寧に具体的に教えていただきました。そして、弁護士さんの紹介もしてくださいました。ですが、加害者の弁護士さんと姉妹の弁護士さんだったためお断りし、自分たちで何件も弁護士さんを探し回りました。最後に辿り着いた弁護士さんは、「刑事裁判から僕でよければ。」と言ってください、橘法律事務所の伊藤先生に決まりました。

平成二十四年三月三十日、検察庁から『起訴』と連絡がありました。被害者参加制度を利用すること、略式起訴は



なくなるとの説明がありました。

五月十八日、西奈小学校ではヘルメットを着用し、登下校になりました。静岡市葵区、駿河区で初めてのヘルメット着用です。PTAの方々が、市や警察と掛け合ってください、ヘルメット通学が実現しました。

六月十六日、浜松の自助会へ参加をしました。その際、多くの被害者遺族の方々と話ができ、とても心強かったです。

十一月十九日、いよいよ初公判が行われました。学校から下校していただけた加奈に〇、１％でも非があると言われたくなく、正直必死でした。ですが、非がある所か加害者は、「見えなかった」を主張し、無罪を求めました。情状酌量を求めてくれることに期待していたのかもしれませんが。私たちはがっかりしてしまいました。

十二月十七日、第二回公判。警察官、目撃者の方の証人尋問。相手の弁護士に警察官や、目撃者の方がかなり叩かれてしまいましたが、警察官の方々、わざわざ名乗り出てくださいった目撃者の方に心から感謝しています。

平成二十五年一月二十五日、第三回公判。鑑定人の証人尋問でした。加奈を検死してくださった方と、加害者の車の底に付いた加奈のランドセルの塗料を調べてくださった方です。検死は、事故時の加奈の全裸写真だったため、裁判長、検事さん、弁護士さん、加害者、私しか見ることはできませんでしたが、亡くなった後も身体を晒されていることが非常に辛かったのと、加害者弁護士が話をしては、ニヤニヤしていることが気に入らせませんでした。

二月十五日、第四回公判。被害者遺族として、母親として法廷に立ちました。今思い出しても、とても怖い経験でした。一度しかない証人尋問。家族の想い。全てが私の肩にのしかかり、かなりのストレスとプレッシャーでした。ですが、やり

終えたときはすっかりした気持ちと、加奈のためにしてあげられたことがとても嬉しかったです。この先、加奈のためにできることはもう限られていることも知りました。

三月七日、第五回公判。被告人尋問。加害者は、私たちに述べたこと、警察での事情聴取とは異なることを述べました。「見ていなかった。」を「見えなかった。」と。弁護士さんに言われたのでしょうか。言い逃れ方を考えたんだと思います。

四月十二日、第六回公判。弁護士さんによる意見陳述。意見陳述には二種類あることを弁護士さんから学びました。刑訴法二九二条の二、被害に関する心情について意見。刑訴法三一六条の三八第一項、法律適用についての意見です。弁護士の話では、法律適用についての意見の方が、効力があるそうです。その代わり、専門家でも難しいそうです。弁護士の前に、「法律適用についての意見を書いてください。」と言われましたが、自分たちの想いしか書くことができず、最終的に弁護士さんにお任せしました。

平成二十五年五月二十七日、判決公判。禁固二年六ヶ月、執行猶予五年。（求刑二年六ヶ月）実刑にはなりませんでしたが、裁判長が、

「実刑でもおかしくない。執行猶予を最大にします。」

と、加奈に非がなかったことを認めてもらいました。無罪になったら加奈の命、死が・・・と考えるとゾッとします。ですが、無罪にならなかったこと、世間に理解されたことが有り難かったです。弁護士さん、検事さん、ずっと付き添いしてください。被害者の会の方々、警察、友人など良い方々に恵まれ、とても感謝しています。

長女は、加奈が生まれたときから、『私の一番の宝物』と言い、ずっと面倒をみてくれました。友達と遊ぶ際も、友達を家へ招き、加奈と一緒に遊んでくれました。加奈がいなくて今、ショックでイライラしたり、泣いてしまったりを度々繰り返しています。次女は、「加奈のところへ行きたい・・・。」と、自ら命を絶とうと病んでしまいました。

今でもいつでも二時頃になると、加奈がそろそろ帰ってくると思い、その時間を気にして、辛くなります。いつか『お母さん!』と嬉しそうな声でドアを開けてくれるのではないかと、加奈の帰りを待っている自分がいます。土日になると、本来子どもたちが皆いる時で、今は加奈がいなくなった喪失感にさいなまれ、狂いそうになります。加奈と同じくらいの年の子を見ると、元気に遊ぶことができなくなった加奈のことを考え、辛くなり、胸が苦しくなります。私はまだ加奈と同年の子を直視することはできません。毎日毎日、救急車で運ばれた血だらけの加奈の顔、左顔面に残った内出血でできたタイヤ痕、加奈を失った喪失感や、加奈の死を一生背負って生きていかなければなりません。はっきり言って生き地獄です。加奈の動画を見ることも、ニコニコ笑う写真を見ることも、加奈の唄ってくれた歌を聴くことも辛くてできません。

何故、加奈だったのか?何故、加奈じゃなきゃなかったのか?加奈じゃなければいいということではありません。誰が被害者でも、こんな辛いことはないのです。加害者の安全確認が命を奪うのです。何故、加奈だったのか?答えはありません。毎日、自問自答の日々です。私の一生の課題だと思います。

二度としない体験であり、二度としたくない体験です。失ったものは大きく、得たものは何もありません。今後、この先、交通事故が無くなってくれば良いのですが、今も悲しみに暮れる被害者や被害者遺族を想うと胸が痛いのです。私たちは、

私たちの経験を被害者遺族に少しでも伝えられたら、してあげることの限られた加奈のためになるのではないかと考えています。